

Q & A

第6回



水口真理子

メディカル・スペースデザイン(株)  
代表取締役  
医療施設専門  
インテリアコーディネーター  
1級カラーコーディネーター

ホスピタルアートの例 (耳原総合病院・大阪府堺市)

- 1 職員・患者・地域住民で描いた各階のエレベーターホール。
- 2 総合受付の版画デザインを施した床タイル(銅版画家:安井寿磨子)。
- 3 エントランスの立体アート(造形作家:YUKO TAKADA KELLER)。
- 4 病棟の小児エリア廊下。



せん。  
次に、ストーリー性を大切にして全体に統一感を持たせることです。診察券などのツールやホームページのデザインとも統一感を表現できれば、一層効果的です。

注意すべき点は、どんなにステキなホスピタルアートでも、ほったらかし・飾りっぱなしではダメということです。常に、患者さんの心に届くアートであるか、そして季節に合っているかということも気にかけていただきたいと思います。

また、ホスピタルアートは、スタッフのためのものでもあります。アートの存在で穏やかな気持ちになり、温かい心で接することは、患者さんのケアに効果的なのではないでしょうか。

インテリア医学の考えを基に、一般的なお悩みから特別なケースまで、時には専門家のレクチャーも受けながら、一緒に勉強していきたいと考えています。

今回は、ホスピタルアートについて、森口ゆたか氏にお聞きしました。

インテリアについてのご質問は編集部まで  
宛先: [apolloia@dentalnews.co.jp](mailto:apolloia@dentalnews.co.jp)

●ホスピタルアート

Q

ホスピタルアートがもたらす効果とは?

A

患者さんとスタッフの心のケアに期待できます



森口ゆたか氏  
美術家、NPO法人アー  
ツプロジェクト理事  
長、京都造形芸術大学  
客員教授

「病気になること」と「病人になること」は同じではありません。患者さんが安心して治療に臨むためには、優れた医療スタッフと最新の医療機器が不可欠ですが、そればかりでなく、アートという人間的な行為を取り入れることで、ともしれば無機的になりがちな療養環境を、温か度でホッとできるような空間にすることが

が、治療と同じくらい大切です。単なる院内装飾ではなく、そのような空間づくりを目的としてアートを取り入れるならば、医院規模の大小にかかわらず、まず考えるべきことは、医院の理念に基づいたコンセプトです。医院側の思いや患者さんに伝えたいことを明確にしてからでないと、具体的には進められま